

TSUKUBA MEDIA ART FESTIVAL

つくばメディアアートフェスティバル2015

市長挨拶

つくば市は、筑波山をはじめとする豊かな自然の恵みのもと、特色ある歴史や文化を育んできました。その一方で、国の研究機関の3分の1以上が集積し、世界的な科学技術都市として発展してまいりました。さらには、2016年5月、伊勢志摩サミットにあわせて開催される「G7科学技術大臣会合」がつくば市で予定されており、今後、より一層「科学のまち」として世界に向けアピールしていくところです。

科学技術の進歩は、私たちの生活や社会に大きな影響を与え、人類の進歩は科学技術の発展とともに歩んできたと言っても過言ではありません。この科学技術とアートを融合させた表現分野のひとつが“メディアアート”と呼ばれ、ゲームや映像など身近なところで様々な応用されており、近年、関心が高まっています。

本展「つくばメディアアートフェスティバル」は、この“メディアアート”の新たな試みを紹介する企画展で、今年度で2回目の開催となりました。単に見るだけでなく、機器に触れたり操作をしたりと、観客が体験を通して楽しんでいただく、インタラクティブアートを中心に、27人のクリエイターによる21作品を展示いたしました。

つくば市は、豊かな発想力や自由な表現力を育む“メディアアート”を積極的に発信することで、より創造力豊かで、活力ある街づくりに寄与するものと考えています。科学技術と芸術、両面の新たな可能性とその魅力を感じていただければ、主催者といたしまして大変嬉しく存じます。

最後になりますが、本展の開催に当たり、快くご出展いただきましたクリエイターの皆様をはじめ、前回に引き続き、多大なご協力を賜りました筑波大学「工学・芸術連携リサーチユニット」様に対しまして、心より感謝申し上げます。

市原 健一

つくば市長 | ICHIHARA Kenichi

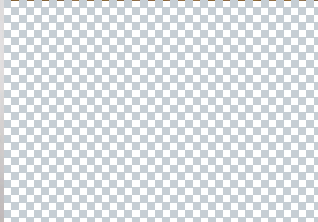
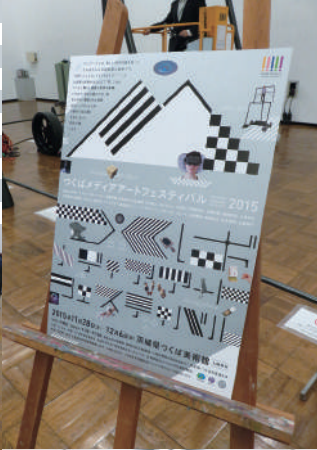
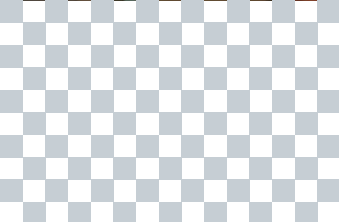
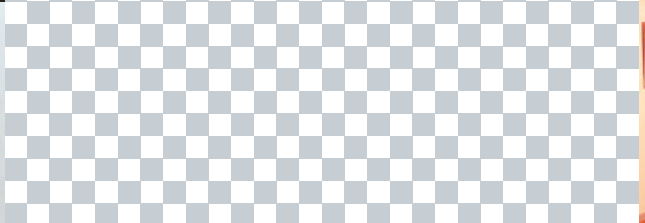
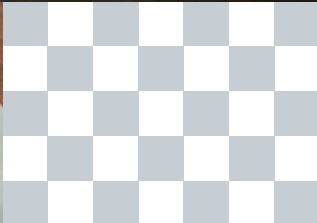
筑波大学におけるメディアアートとエンパワーメント情報学

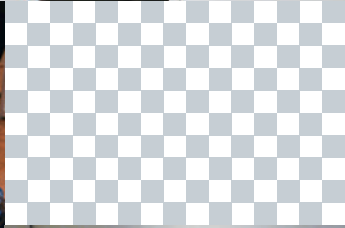
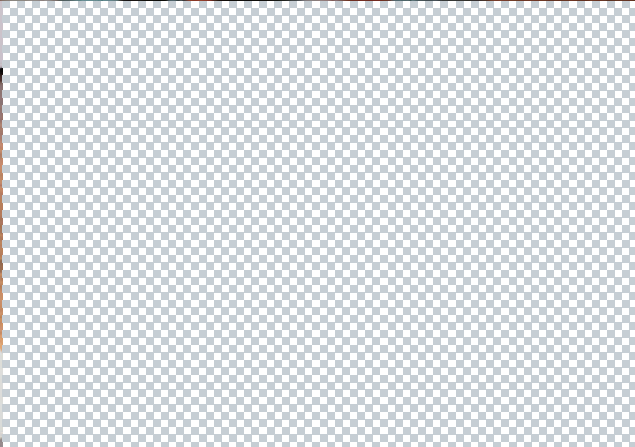
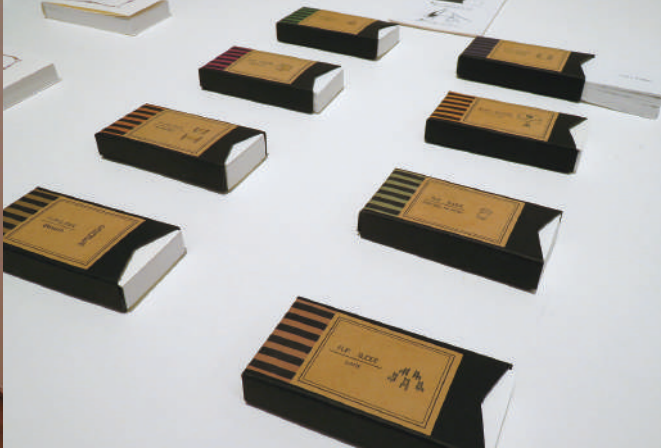
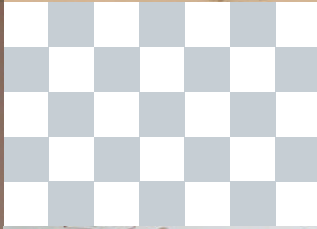
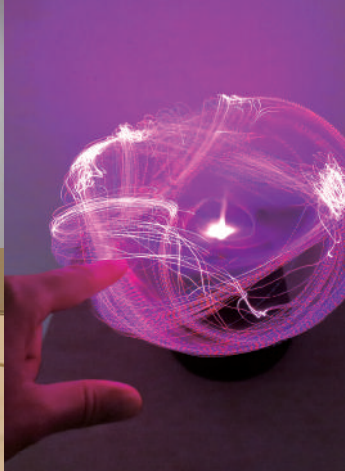
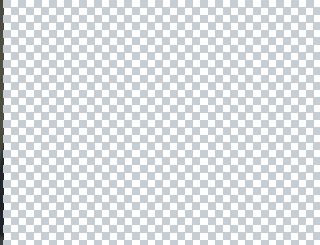
筑波大学は、メディア技術の先端研究と科学技術を用いた芸術表現の分野においてともに世界トップレベルにあります。特に、芸術学部を有する総合大学としては稀有な存在であり、30年以上にわたり、世界のメディアアートシーンにおいて重要な役割を果たしてきました。筑波大学の芸術専門学群をはじめとする各学部は、世界的なメディアアーティストを数多く輩出してきました。近年、工学研究者が芸術表現によって研究成果を発表する活動が盛んになっていますが、筑波大学では90年代以前からそのような活動が先駆的に展開され、この動向の嚆矢となっています。このような歴史的背景を含め、筑波大学における学際的な研究者集団である「工学・芸術連携リサーチユニット」を2012年に結成しました。このリサーチユニットが第1回に続き、第2回つくばメディアアートフェスティバルを企画しました。内山俊朗准教授、村上史明助教に協力をいただき、テクノロジー、アート、デザインを横断する観点から作品を選びました。

筑波大学では、2013年に文科省博士課程教育リーディングプログラムに「エンパワーメント情報学プログラム」が採択され、上記のリサーチユニットのメンバーが参画して芸術の視点を取り入れた分野横断型の情報学教育を推進しています。研究室と展示室が合体した「エンパワースタジオ」をオープンさせ、本プログラム履修生がここで制作活動を行っています。また、本プログラムでは、Ars Electronica Futurelabと共同で学生の教育を行うフレームワークである“LabX”を本年5月から立ち上げました。4名の学生が2チームに分かれてこれに参加し、9月には世界最大のメディアアートの祭典であるArs Electronica Festivalで、新作を展示しました。彼らの作品も今回のつくばメディアアートフェスティバルに展示しました。今後もエンパワーメント情報学プログラム履修生のさらなる発展を期待します。

岩田 洋夫

筑波大学システム情報系教授 | IWATA Hiroo





ARTIST

01

NISHIMURA Wataru

西村 渉

UCHIYAMA Toshiaki

内山 俊朗

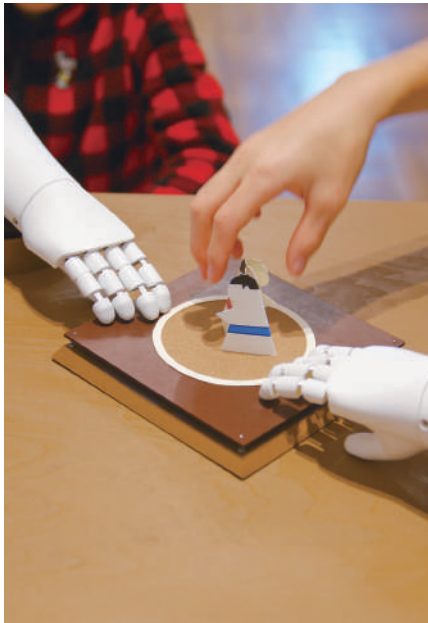
PROFILE 西村渉＝筑波大学大学院人間総合科学研究科感性認知科学専攻1年。
内山俊朗＝筑波大学芸術系准教授。



osumode

2015 | エンターテインメント

osumodeは、オンライン対戦型紙相撲です。スマートフォンアプリと連動し、ロボットハンドが人の手の代わりに土俵を叩きます。いままでの紙相撲は同じ空間でしか遊ぶことができませんでしたが、osumodeは、インターネットを通じて世界中の人たちといつでもどこでも紙相撲対戦をすることができます。紙相撲という昔ながらの遊びを現代の技術で再構築し、楽しさを共有することができればと思い開発しました。



ARTIST

02

YAMAMORI Meiko

山森 明子

ITO Shigeomi

伊藤 成臣

KAMEZAKI Reina

亀崎 玲奈

SATO Megumi

佐藤 愛

UCHIYAMA Toshiaki

内山 俊朗

PROFILE 山森明子＝筑波大学芸術専門学群デザイン専攻2年。
伊藤成臣＝筑波大学大学院システム情報工学研究科知能機能システム専攻1年。
亀崎玲奈＝筑波大学芸術専門学群デザイン専攻4年。
佐藤愛＝筑波大学情報学群情報メディア創成学類4年。
内山俊朗＝筑波大学芸術系准教授。



指キタスファイター

2015 | エンターテインメント

指キタスファイターは、指相撲をテクノロジーで拡張した新しい遊びです。対戦格闘ゲームの中に入り込んだような世界観で、プレイヤーだけでなくギャラリーも楽しめるような工夫をしています。指相撲と対戦格闘ゲームが融合した、ひと味違う勝負をお楽しみください。

協力＝長嶋洋一（静岡文化芸術大学）



ARTIST

03

KOZAKI Yuta

小崎 湧太

KOSEKI Misaki

小関 美咲

FUJIMORI Masako

藤森 晶子

UCHIYAMA Toshiaki

内山 俊朗

PROFILE 小崎湧太＝筑波大学大学院システム情報工学研究
科知能機能システム専攻1年。

小関美咲＝筑波大学芸術専門学群デザイン専攻4年。

藤森晶子＝筑波大学情報学群情報メディア創成学類4年。

内山俊朗＝筑波大学芸術系准教授。



BandTrain TX

2015 | エンターテインメント

BandTrain TXは、電車ごっこをモチーフとした、みんなで音楽を楽しむ参加型メディアアート作品です。ロープの中に人が入って前進すると「線路は続くよどこまでも」の曲が流れます。ロープの中の人数が増えると、楽器のパートが増えていき、どんどん曲が盛り上がっていきます。今回はつくば市でのイベントにちなんで、つくばエクスプレスの車両をモデルにしました。

協力＝長嶋洋一、杉浦綾(静岡文化芸術大学)

※TXマークは首都圏新都市鉄道株式会社の許可を得て使用しています。



ARTIST 03 / 04

ARTIST

04

OOZU Takeshi

大図 岳

PROFILE 2011年 筑波大学芸術専門学群入学。2015年同
大学卒業。同年 筑波大学大学院エンバワメント情
報学プログラム入学。



ニゲルイス

2015 | 箱椅子デバイス

ニゲルイスは椅子の外観を持つデバイスである。これは椅子のように見えるが、鑑賞者が近づき座ろうとすると逃げ出し、座らせまいとする。座らせないことで、逆に座ることを意識させるとともに、椅子のもつ意図のようなものを感じさせる。



TSUKUBA MEDIA ART FESTIVAL

007

ARTIST

EGUCHI Tackt

05

江口 拓人

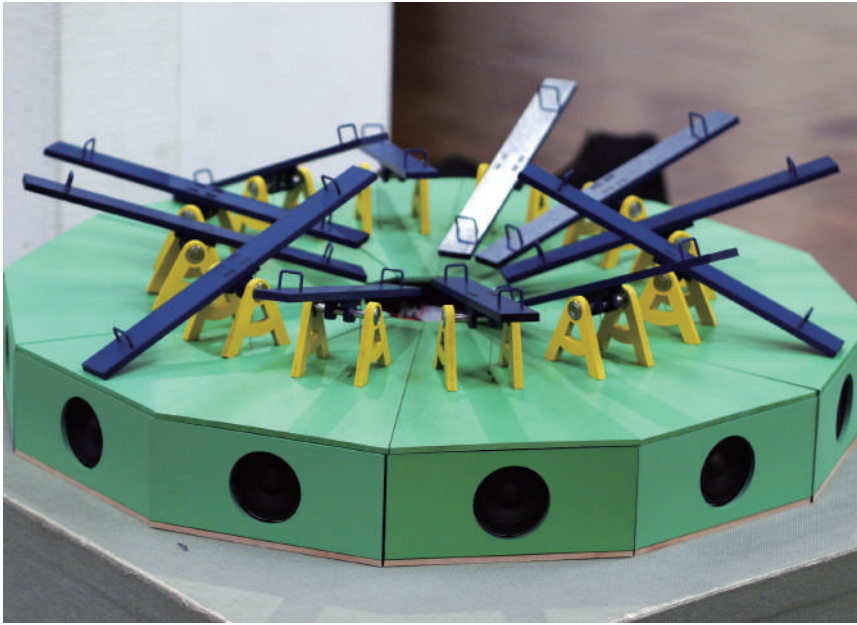
PROFILE 筑波大学大学院芸術研究科総合造形コース修了。
2007年より「パンタグラフ」に参加。THE パーティー
としてライブパフォーマンスも多数。



See/Saw

2015 | ミクストメディア

シーソーの語源はSee(反復する)Saw(ノコギリ)の意らしいが、See(見る)Saw(見た)と解釈するとまた一つ面白さが生まれる。見る人と見た人、二人の関係性が順番に入れ替わる事象をモチーフに制作した。



ARTIST

IWATA Hiroo

06

岩田 洋夫

PROFILE 1986年 東京大学大学院工学系研究科修了(工学博士)、同年筑波大学構造工学系助手。現在 筑波大学システム情報系教授。バーチャルリアリティ、特にハプティックインタフェース、ロコモーションインタフェース、没入ディスプレイの研究に従事。SIGGRAPHのEmerging Technologiesに1994年より14年間続けて入選。Prix Ars Electronica 1996と2001においてインタラクティブアート部門 honorary mentions 受賞。2001年 文化庁メディア芸術祭優秀賞受賞。2011年 文部科学大臣表彰科学技術賞受賞。



Big Robot Mk1

2015 | 巨大ロボット

Big Robot Mk1は、人が身長5mの巨人に拡大されたとしたら、どのような身体感覚を得るのか、という問いに答えるものです。体験者は車輪のついた2本の脚に支えられた台の上に乗り、歩くとその動作に合わせて車輪によって前進し、脚の関節が動いて揺動させます。この前進と揺動の動きを組み合わせることによって、搭乗者の頭に、身長5mの巨人が歩行する時の軌跡に一致するような動きを与えます。その結果、体験者は身長5mの巨人になったような歩行感覚を得ます。この機構は、搭乗者が巨人の感覚を得るだけでなく、周囲で見ている人が巨人が歩いているように見えることをねらって設計されています。



ARTIST

Aisen Caro Chacin

07

アイセン・カロ・チャシン

PROFILE アメリカ・ボストン生まれ。ベネズエラとアメリカで教育を受け、現在筑波大学エンバウメント情報学プログラム博士課程に在籍中。研究と興味分野は主に、芸術、科学とテクノロジーであり、これまでに New Interfaces for Musical Expression 学会、The New York Hall of Science、Ceontemporary Arts Museum Houston、Maker Faire、Dokbot など作品を発表してきた経験を持つ。現在は筑波大学エンバウメント情報学博士課程にて、補助器具のデザインに従事している。



Echolocation Headphones

2014 | 映像インスタレーション

エコーロケーション・ヘッドフォンは、指向性音響技術を用いた新しい研究の取り組みである。これは、本来指向性を持たない人の聴覚機能を、指向性音響を用いて視覚における「焦点」のような指向性を再現することで拡張する試みである。人の反響定位は現状、視覚に障害を持つ人が反響音の空間的理解を増進させることで試行錯誤的に実現しており、ヒト以外の種でも進化の過程で独自の反響定位能力を獲得しているものも多い。このエコーロケーション・ヘッドフォンは、視覚における焦点のような指向性を聴覚に持たせることで、使用者が周囲の空間を反響音に基づいてより詳細にイメージするための支援を提供するものである。



ARTIST

Aisen Caro Chacin

08

アイセン・カロ・チャシン

00ZU Takeshi

大図 岳

PROFILE アイセン・カロ・チャシン＝Artist 07 参照
大図岳＝Artist 04 参照



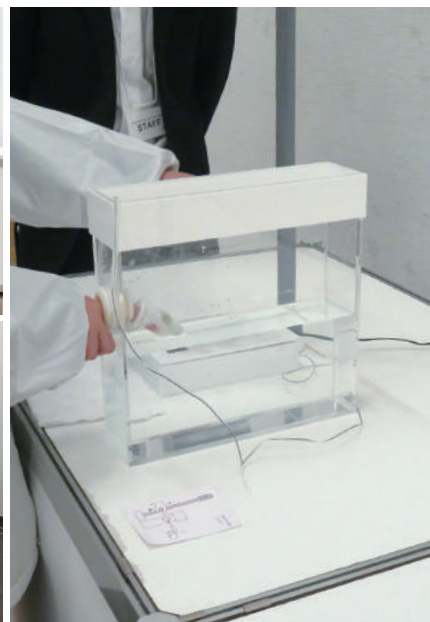
筑波大学
University of Tsukuba

IrukaTact

2015 | グローブ状デバイス・触覚体験装置

IrukaTact は、イルカのエコーロケーションに着想を得て作られたグローブ状デバイスである。水中にある物体をソナーで感知し、その距離に応じて指先に触覚を与える。デバイスを装着した者は、たとえ水の濁りなどで物体が見えない場合でも、遠くからその物体を認識できる。

IrukaTact は洪水等の緊急事態に備えた「キット」として設計されており、DIY マニュアルを見することで、誰でも自作できる。



ARTIST

09

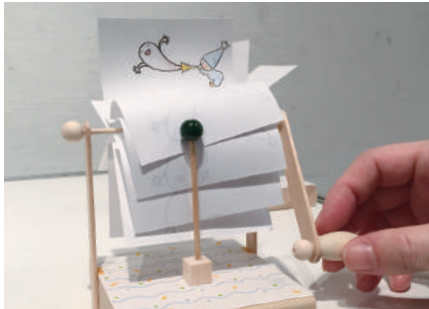
OOTAKA Nayuko

大高 那由子

PROFILE 1982年 千葉県浦安市生まれ。2004年 筑波大学芸術専門学群総合造形コース卒業。コマ撮り、手書きアニメ、Flashなど様々な手法を使ったアニメーション作品を教材アニメ・TVCMなどを中心に制作。著書にアナログアニメーションのおもちゃの作り方を紹介した『手作りアニメレシビBOOK』(技術評論社)



ワークショップのためのキノーラ



朝・昼・夜



choice

ワークショップのためのキノーラ

2015 | キノーラ

朝・昼・夜

2015 | 絵画、フリップブック、映像

choice

2012 | キノーラ

アニメーションの原始的おもちゃである「キノーラ」「ばらばらマンガ」を用いた作品群。川崎市アートセンターで行われたワークショップのために制作した見本用オリジナルキノーラ8体。スフィンクスの謎掛けに寄せて作られた3体の仮想生物の生態を表す『朝・昼・夜』。ふたつの未来への選択肢を提案する大型キノーラ『choice』。

ARTIST

10

tamax

tamax

PROFILE 1980年生まれ。2004年 筑波大学芸術専門学群視覚伝達デザイン科卒。卒業制作は巨大ハンドル式パラパラマンガ。卒業後はOLをしながら日夜パラパラマンガの制作に励み、商品化した作品を都内、京都などの雑貨店・本屋などで販売している。絵画や映像などと同じように、パラパラマンガが作家の表現手法の一つとなる未来を目指している。



NEO パラパラマンガ

2005-15 | フリップブック

フリップブックの新たな可能性を追求したNEOパラパラマンガ。スライド式のケースに入った「フリップスライダー」をはじめ、映画や文学の名作を表現した「パラパラ座」「パラパラ文庫」など。哲学的、詩的な独特の世界を表現している。



ARTIST

YAMAMOTO Miki

11

山本 美希

PROFILE 筑波大学人間総合科学研究科芸術専攻修了。

2011年に絵本作品『爆弾にリボン』をデビュー作として出版。2012年に単行本化されたマンガの短編集『Sunny Sunny Ann!』が、第17回手塚治虫文化賞の新生賞を受賞。2014年9月に書き下ろしのマンガ単行本『ハウアーユー?』を刊行し、第19回文化庁メディア芸術祭マンガ部門審査委員会推薦作品に選出される。挿絵・イラスト等も手がける。



Rotkäppchen

2015 | 短編マンガ

タイトルの Rotkäppchen は「赤ずきん」を意味するドイツ語で、本作はそれを題材に描いた4ページの言葉のない短編マンガ作品。主にアクリル絵の具を使用して制作した。

初出＝インディーズマンガ雑誌『ユースカ vol.4』2015年5月刊行



ARTIST

O.K.farm

12

O.K.farm

(大平隆文、大島小野香、近藤サヨコ、古沢和宏)

PROFILE 大平隆文(O/窓明かり採集家)、大島小野香(O/写

真家)、近藤サヨコ(K/映像作家)、古沢和宏(F/痕跡本収集家)の4人を中心メンバーとしたグループ。

ツルツルの頭に様々なものを投影するプロジェクト『Projection ATAMapping Project(プロジェクション・アタマッピング・プロジェクト)』を思考制作中。尚、メンバーのうち3人はズボンのチェックで演奏するバンド「THE ZIPPERS」のメンバーでもある。

Projection ATAMapping Project:
Space exploration

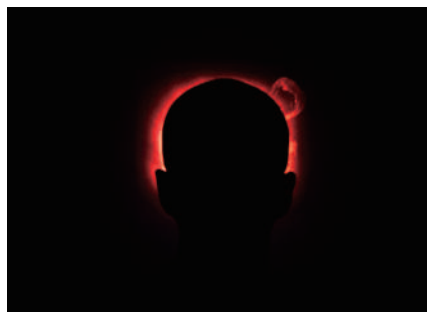
2014 | 写真、映像

2012年暮れにグループ「O.K.Farm」が始めた「Projection ATAMapping Project(プロジェクション・アタマッピング・プロジェクト)」は、あえてつるつる頭をスクリーンにプロジェクションを展開していくというプロジェクトです。

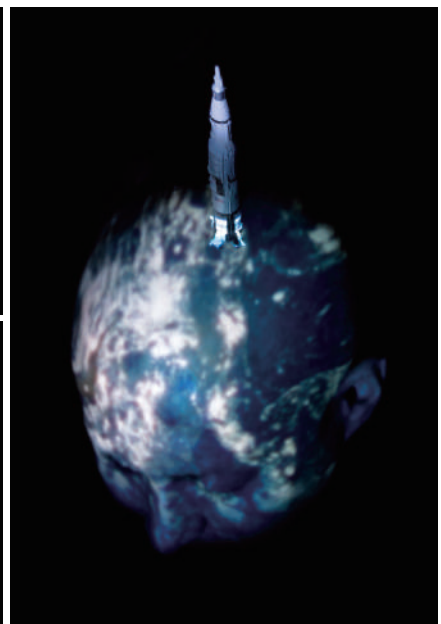
正に Projection Mapping の「旧時代型進化形」、それが「Projection ATAMapping Project」です。

現在、写真、映像、パフォーマンス等、様々な表現形態を模索し表現活動を行っています。今作は個人の「頭」という非常にパーソナルかつミクロなスペースで広大な宇宙を展開するシリーズ「Space exploration」です。

[Total solar eclipse] 2009.07.22



[Lunar surface] 1969.07.21.03:39 UTC



[APOLLO11 & SATURN V] 1969.07.16.13:32 UTC

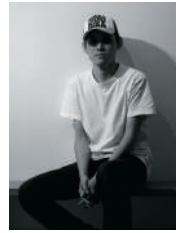
ARTIST

13

MIZUNO Katsunori

水野 勝規

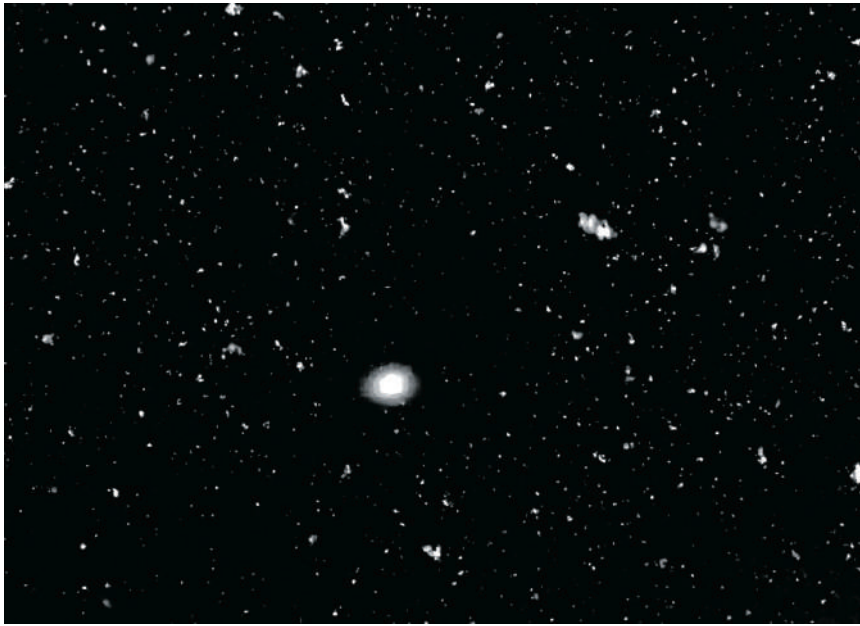
PROFILE 映像作家。1982年 三重県生まれ。2008年 京都市立芸術大学大学院修了。京都を拠点に、映像作品とインスタレーションを発表している。日常風景にある「情景」を断片的に撮影。それを組み替えることにより、一つの風景を作り出す試みをしている。主な活動に、2015年「六甲ミーツアート2015」六甲オールドゴールミュージアム(兵庫)、2014年「カミノ/クマノ 聖なる場所へ」三重県立美術館(三重)、2013年「イメージフォーラム・フェスティバル 2013」(東京など5都市を巡回上映)などがある。



inverted universe

2015 | ビデオアート

音もなく、しんと降る雪。
眺めていると、何かの弾みで「バンッ!」とイメージが反転するときがある。
「空」から「宙」へ変換するような。
そんなイメージで情景を構築してみました。



ARTIST

14

KATO Yoshimasa

加藤 良将

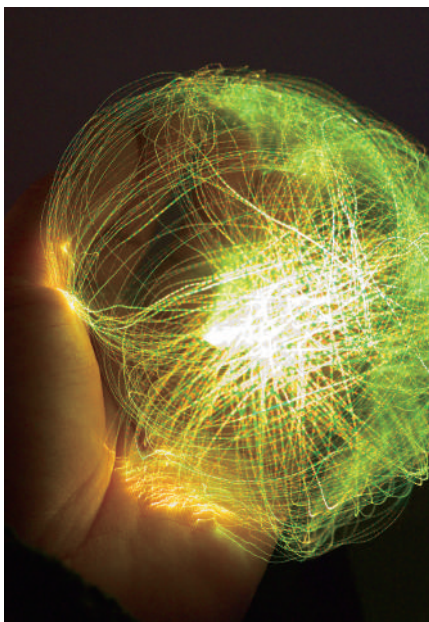
PROFILE 2012年 中京大学情報科学研究科博士後期課程満期退学。大学院在学時より芸術大学の非常勤講師、小中学生向けのワークショップを行い、プログラミング・ハードウェアを取り入れた作品を中心に制作、インタラクティブアート／メディアアートの作家として活動。ベンチャー企業でのハードウェアの設計・開発を経て、現在は相山女学園大学文化情報学部の手。代表作は「White Lives on Speaker」(PRIX ARS ELECTRONICA 2007にて Honorary Mention)、出品作品の前作「Rokuro」(第15回学生CGコンテストにて優秀賞)。



mirageFlower

2013-15 | インタラクティブアート

本作品では、本来は触れられない光をLED・光ファイバー・モーターを組み合わせることで、陶芸の轆轤を扱うように自由な形を作ることが出来ます。暗室で高速に回転している光は空間に浮かび上がっているように見え、それはコンピュータのディスプレイ上の3DCGのようでもあり、鑑賞者は不思議な感覚を体験することが出来ます。本作品は、LEDや電子基板などのデジタルな制御で制作されている装置ですが、その単なる装置を作品として成立させるためには鑑賞者の手によるアナログな接触という行為が必要になるインタラクティブアートです。アナログな操作とデジタルの制御の絶妙な均衡によって本作品は表現されています。



ARTIST

KATAOKA Junya

15

片岡 純也

PROFILE 2005年 武蔵野美術大学デザイン情報学科卒業。

2010年 筑波大学芸術専攻総合造形領域修了。主な展示に、2015年「Art gwangju 2015」Kim Daejung Convention Center(光州、韓国)、「アーツ・チャレンジ2015」愛知芸術文化センター(愛知)、2014年「Interact」Old school art house(フリーセイ島、アイスランド)、「ambiguous border」パリ国際大学日本館(パリ、フランス)、「TEMPORARY ITEMS」Gallery LE204(パリ、フランス)、2012年「Somrac」Galerija Kapelica(リュブリャナ、スロベニア)などがある。



Photo by hergo

Ghost in the sellotape

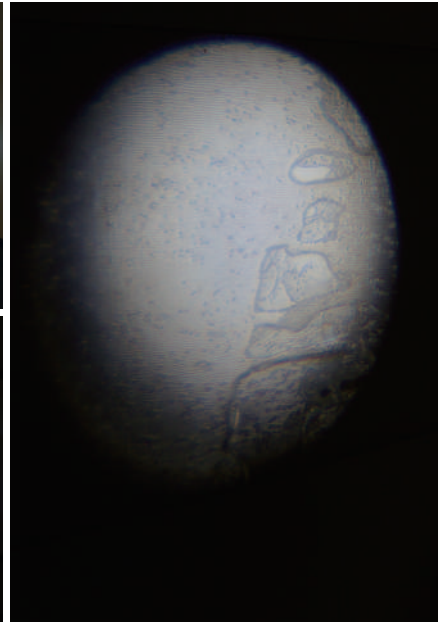
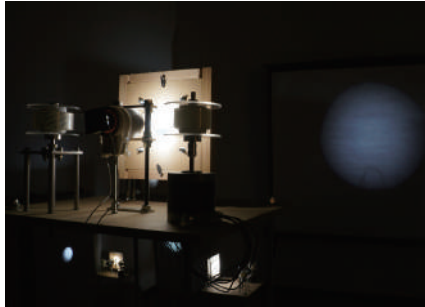
セロテープの惑星

2014 | 映像インスタレーション

幻灯機による映像インスタレーション作品。映像フィルムとして投影されているものはセロテープ。質が不安定なセロテープの表面には無数の糊むらがあり気泡がたくさんある。それを投影するとどこかの惑星のようにも見えるし、顕微鏡で覗いたミクロの世界のようにも見える。

幻灯機には霊的なものと調和しやすいメディア的特性がある。

セロテープを投影することで、マクロにもミクロにも共通する、宇宙の深淵に迫るような模様を見ることができる。それは物質や現象、森羅万象に宿る霊を映しているのかもしれない。



ARTIST 15 / 16

ARTIST

Masa Jazbec

マーシャ・ヤスベッツ

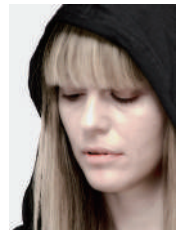
16

Floris Erich

フローリス・エリック

PROFILE マーシャ・ヤスベッツ(スロベニア)は、リンツ工科造

形芸術大学大学院(オーストリア)・メディア学部インターフェイスカルチャー専攻を経て、現在は筑波大学エンバワメント情報学博士課程に在籍している。現代アート理論、とりわけニューメディアに造詣が深く、インターアクティブ装置の作成も行っている。アート＝サイエンスのイベントを数多く企画し、Speculum Artium ニューメディア芸術祭のキュレーターも務めた。これまで Ars Electronica、Lab30、MFRU、Sonicaなどの芸術祭に作品を出品している。



idMirror

2015 | 電子機器

idMirrorは、これまでに社会的ネットワークや新興の移动通信技術が人間のアイデンティティの認識にどのような変化をもたらしてきたかを研究する芸術プロジェクトです。ここでは、鏡とよく似た形態のタブレット型コンピューターを利用して、来訪者が顔をミラー内のオブジェクトに向けると、思いがけない操作によって顔面像が変わり、それによるアイデンティティの攪乱を楽しめます。それは、日常生活を含むあらゆる環境が著しく情報化されているこの現代世界での人間の立ち位置を再定義する試みです。



TSUKUBA MEDIA ART FESTIVAL

013

ARTIST

17

MORIWAKI Hiroyuki

森脇 裕之

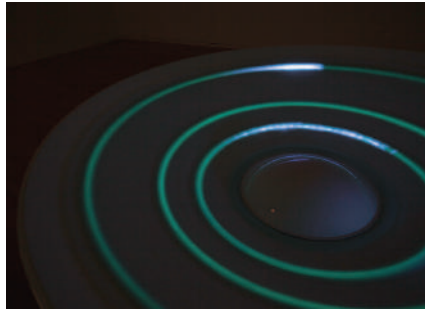
PROFILE ライト・アーティスト。多摩美術大学情報デザイン学科准教授。LEDを用いたインタラクティブな作品「レイヨ＝グラフィー」(1990年)、「夢を見る夢を見た...」(1995年)「Geo-Sphere」(1996年)などの代表作では、電子パーツそのものが重要な作品要素となっている。「記憶の庭」港千尋+森脇裕之(1998年)などでメディアを用いたインスタレーションを展開する。また「宇宙の旅」展(2001年、水戸芸術館開館10周年記念事業)や「ミッション[宇宙×芸術]～コスモロジーを超えて～」展(2014年、東京都現代美術館)などの宇宙芸術展に参加した。



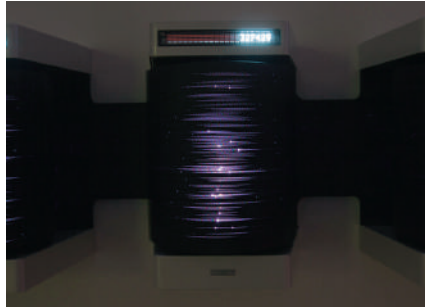
展示風景



echo-π



echo-p



echo-p

echo-π

2014 | インタラクティブライトアート

echo-p

2014 | インタラクティブライトアート

「echo」シリーズは2つの作品で構成されています。どちらも観客の手によって宇宙をつくり出す作品です。宇宙の原理では、回転が始まるとそこに時間という概念が生まれます。パラボラ型の作品「echo-π」を回すと、回転数に応じて光が走り始めます。回転によって生じた光は、加速して円盤のなかを飛び回ります。マニ車の作品「echo-p」は、回せば誰でも宇宙旅行をしたことになります。作品上部のディスプレイで、これまで回転した回数が累計されてカウントされています。

ARTIST

18

PANTOGRAPH

パンタグラフ

PROFILE 広告、雑誌表紙、CDジャケットのイメージビジュアルからアニメーションムービー、アートイベントの企画制作まで幅広い分野で活動。立体造形を得意とし写真やアートアニメーションで多数の作品を発表しているクリエイティブユニット。



**パンタグラフ
コマ撮りアニメーション**

2008-15 | 映像、ジオラマ

パンタグラフが制作したコマ撮りアニメーション、および活動内容のショーリール。



Google AdWords Express ©Google ©PANTOGRAPH

作品配置図

15 片岡純也《Ghost in the sellotape/セロテープの惑星》

14 加藤良将《mirageFlower》

12 O.K.farm(大平隆文、大島小野香、近藤サヨコ、古沢和宏)《Projection ATAMapping Project: Space exploration》

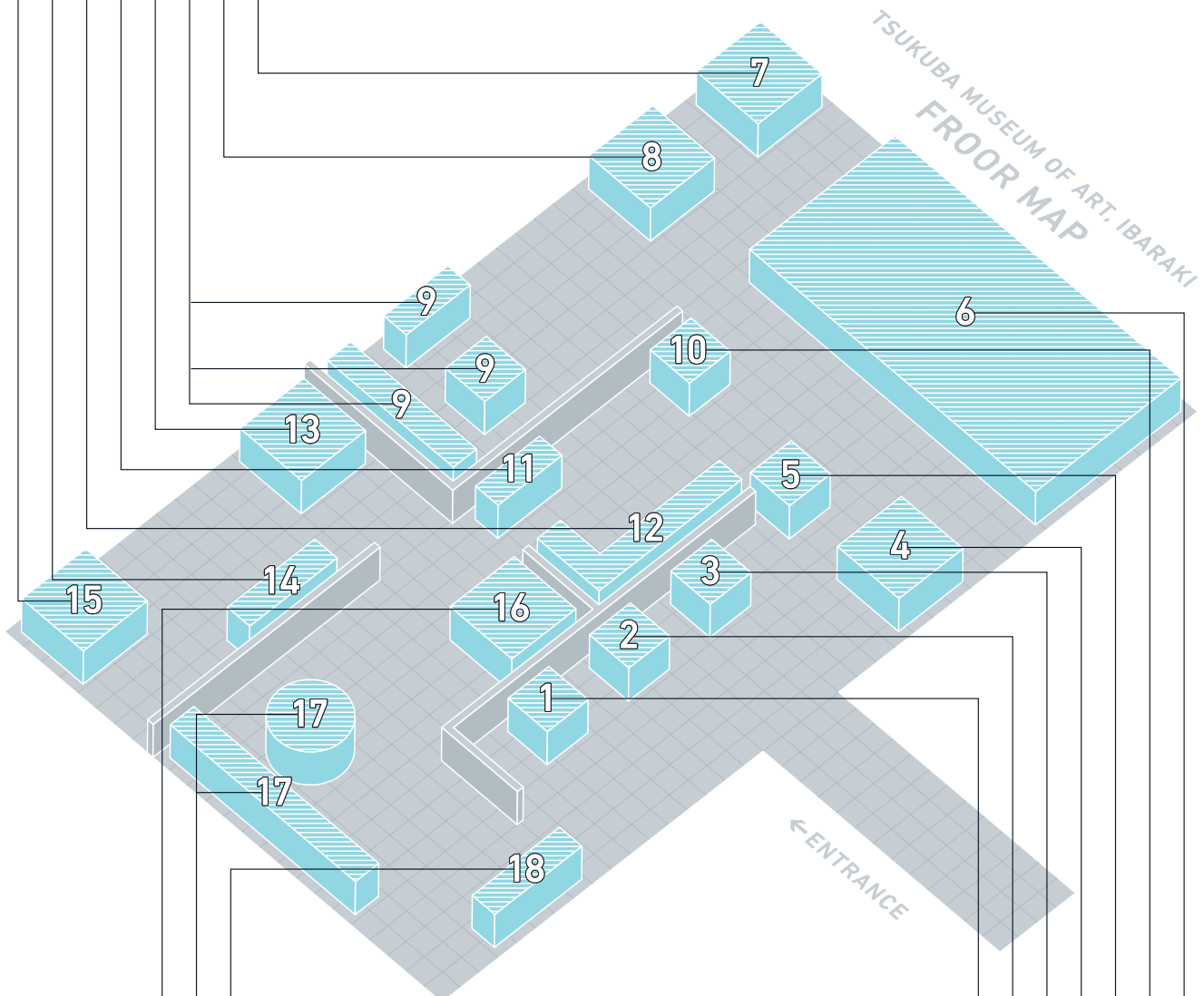
11 山本美希《Rotkäppchen》

13 水野勝規《inverted universe》

9 大高那由子《ワークショップのためのキノーラ》《朝・昼・夜》《choice》

8 アイセン・カロ・チャシン、大図岳《IrukaTact》

7 アイセン・カロ・チャシン《Echolocation Headphones》



1 西村渉、内山俊朗《osumode》

2 山森明子、伊藤成臣、亀崎玲奈、佐藤愛、内山俊朗《指キタスファイター》

3 小崎湧太、小関美咲、藤森晶子、内山俊朗《BandTrain TX》

4 大図岳《ニゲルイス》

5 江口拓人《See/Saw》

10 tamax《NE0パラバランガ》

6 岩田洋夫《Big Robot Mk1》

18 バンタグラフ《バンタグラフ コマ撮りアニメーション》

17 森脇裕之《echo-π》《echo-p》

16 マーシャ・ヤスベツ、フローリス・エリック《idMirror》



つくばメディアアートフェスティバル2015

TSUKUBA
MEDIA ART
FESTIVAL

企画概要 PLANNING OVERVIEW

「つくばメディアアートフェスティバル」は、科学のまちつくばから新たな文化を発信することを目的として、筑波大学工学・芸術連携リサーチユニットと協働で、2015年3月に始めた企画展で、今回で2回目の開催となりました。

今回は、筑波大学の教員、学生、卒業生に限らず、国内で教員やアーティストとして活動している個人や団体27組が出展しました。

展示作品は、21点。プロジェクションマッピング、写真等の映像作品に加え、巨大ロボット、パラパラ漫画、ライトアート等の実際に触ることのできる作品まで、多種多様なメディアアートが展示され、見るだけでなく体験し楽しめる展示会となりました。

開催期間	2015年11月28日(土)～12月6日(日)
会場	茨城県つくば美術館
主催	つくば市
共催	筑波大学工学・芸術連携リサーチユニット つくば市教育委員会、公益財団法人つくば文化振興財団
後援	茨城県
協力	宇宙航空研究開発機構(JAXA) 筑波大学グローバル教育院エンパワーメント情報学プログラム

延べ来場者数——2,012人

展示——1,748人 | 作品試乗会——59人 | ワークショップ——205人

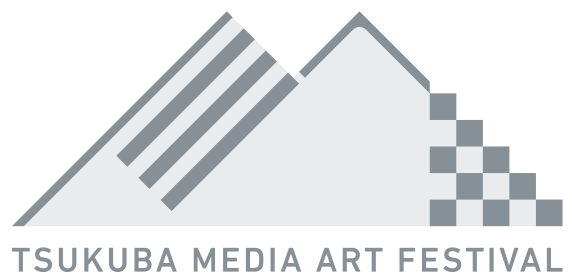
TSUKUBA
MEDIA ART
FESTIVAL

発行物 PUBLICATIONS

チラシ・ポスター



ロケーション



会場配布パンフレット



開催日 2015年11月28日(土)・29日(日)・12月5日(土)・6日(日)

まるで巨人!?“Big Robot Mk1” に乗ってみよう!

筑波大学の岩田洋夫教授の作品として出展された巨大ロボット「BigRobotMk1」の作品試乗会が、会期中の4日間限定で実施されました。身長5mの巨人になった感覚を体験できる珍しい機会ということで、当日参加も多数集まり、大人から子どもまで59名が試乗しました。搭乗の様子や搭乗者の感想は、筑波大学バーチャルリアリティ研究室の研究活動に役立てられます。

ARTIST 06 IWATA Hiroo



開催日 2015年11月28日(土)・29日(日) 各日3回

アーティスト森脇裕之氏による宇宙のワークショップ 星空スコープをつくろう

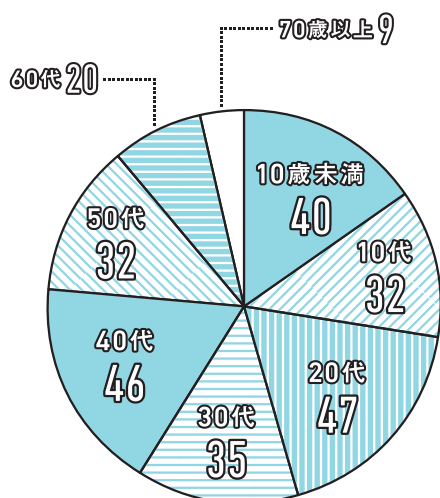
筑波大学大学院修了のライトアーティスト森脇裕之氏によるワークショップが、2日間・各日3回実施されました。まず、「宇宙体験プログラム」として、星空案内人・鈴木裕行氏がガイドとなり、宇宙が持つ神秘的な魅力を映像とともに紹介。宇宙へのイメージを膨らませた後、森脇氏による星空スコープ・ミニプラネタリウム制作を行いました。参加者は思い思いに自分だけの星座を作り、嬉しそうにのぞきこんでいました。

ARTIST 17 MORIWAKI Hiroyuki



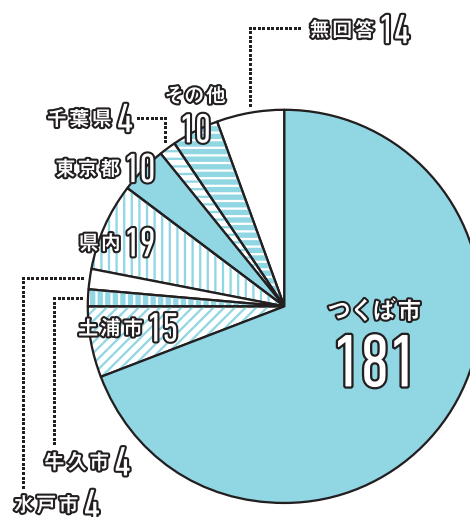
No. 001 | Data. Nov - Dec, 2015

年齢はおいくつですか？



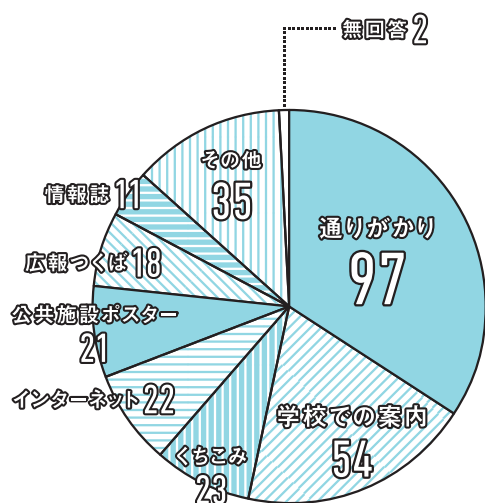
No. 002 | Data. Nov - Dec, 2015

お住まいはどちらですか？



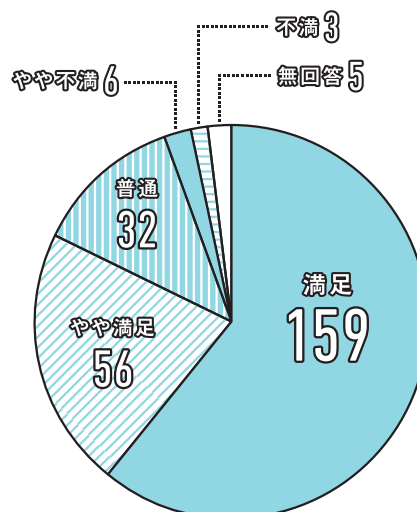
No. 003 | Data. Nov - Dec, 2015

本展示を何で知りましたか？



No. 004 | Data. Nov - Dec, 2015

展示内容はいかがでしたか？



展示内容について率直なご意見・ご感想をお聞かせください（一部抜粋）

- 1 ぼくもきかいをつくってここに出したいです。
- 2 子ども大人も楽しめる企画と展示でした。幻想的なものからシャレがきいたものまで楽しめました。素敵な時間をありがとうございます。
- 3 星空スコープ作りも素敵でした。工作だけでなく星空案内もこの時期にぴったりだなと思いました。
- 4 学生さん達に説明をたくさんしてもらえて良かった。
- 5 情熱がある人が多く面白かった。これからも頑張してほしい。
- 6 発想を探るのが面白い。
- 7 作品をみるだけでなく触れられるので「体験」として心にのこりやすく、印象深いものとなった。
- 8 インタラクティブな作品が多く退屈せず楽しめた。
- 9 もう少し展示数があるとよかった。
- 10 他に観覧者がいなかったことと、1人で来館したため、ゲームができなかった。
- 11 説明を聞くまでコンセプトが分からなかった。
- 12 説明が少なかったので、意図を汲みとるのが難しい。
- 13 パッと見では何をするか分からないものが少なくなかったので、展示の工夫が欲しいです。
- 14 一人一人の作品ならば個展をすれば良いだけなので、展覧会全体を鑑賞する人の立場に立って投げかけてほしいです。
- 15 良いシゲキになりました。
- 16 発想は良いがもう少し感動が欲しい。
- 17 他分野とのコラボレーションで様々なアイデアをひとつの作品に仕上げていく様子に若い方々の可能性を感じました。
- 18 楽しいものと、こわいもの。あまり進化してほしくないです。
- 19 体験展示がとても楽しかった。これからも続けてほしい。
- 20 常設で見たいと思いました。
- 21 おもしろい！5歳の娘もハマってました！
- 22 ぜひ商品として出回ってほしいものが多く、楽しめました。
- 23 さわれる美術館っておもしろいですね！

今後の展示についてご意見・ご要望がありましたらお聞かせください（一部抜粋）

- 1 展示品を販売してほしい。
- 2 子どものために絵かきコーナーを作って、未来のロボや機械をかいてもらったら楽しそうです。
- 3 あまり人が入っていないのがもったいない。
- 4 もっとたくさんの人に来てもらえるようにすると良いと思います。
- 5 都内の美術館でもチラシを配布されると良いと思います。
- 6 来年に向けさらに頑張ってください。
- 7 美術や図工の時間を利用して、小中学生に見せてあげたい。
- 8 もっと早く知り、ゆっくり見たかった。
- 9 未来をにう発想が素晴らしいと思います。これからもどんどん活躍してってください。

つくばメディアアートフェスティバル2015 図録
TSUKUBA MEDIA ART FESTIVAL 2015 CATALOGUE

編集	つくば市文化振興課
編集協力	筑波大学工学・芸術連携リサーチユニット
P4-5写真提供	西村 渉、山森 明子、内山 俊朗
デザイン	森垣 賢
印刷・製本	株式会社総合印刷新報社
発行	2016年3月25日
	つくば市